# The Belle Silicon Vertex Detector and CP Violation 石野 宏和(東京工業大学) for the Belle Collaboration 2004年3月8日 科研費特定領域 第2回研究会 @つくば国際会議場エポカル

- イントロダクション
- SVD2とその性能
- 最新のCPの破れの測定結果と展望

#### Belle実験とKEKB加速器



KEKBは8GeVの電子と3.5GeV の陽電子の衝突型加速器。 最高ピークルミノシティは 120.0×10<sup>32</sup>/cm<sup>2</sup>/s (3月1日) 世



### KEKB加速器の性能



を持つ加速器

1日に約90万個のY(4S)を生成。

# Belle<mark>検出器</mark>



#### **Belle Collaboration**



# 274 authors, 45 institutions

many nations



 B中間子系での時間に依存するCPの破れ を測定し、CKM行列の角度を測定する。

- 数億個の大量のB中間子と100µm以下の精 度でのB中間子の崩壊点の測定が必要。

- 実験を遂行するためには世界最高強度を持つKEKB加速器とSVDが必要である。

#### Silicon Vertex Detector (SVD)とは

2.84cm

#### Double sided Silicon Strip Detector (DSSD) をラダー構造に配置し荷電粒 子の通過位置を約10µmの精度で測定。



#### SVD



#### ラダーを3次元的に配置し、 荷電粒子のトラックパラメー タを測定。

# バーテックスフィットによりB 中間子の崩壊点を測定。

6+12+18+18 = 54 ladders

## SVDのアップグレード

- 1999年にSVD version1 (SVD1)をインストール。
  - 2003年夏まで順調に作動。
  - 4年間の間に約1Mradの放射線照射を受け、放射線耐性の限界に達しよう としていた。
- 2003年夏にSVD version2 (SVD2)をインストール。
  - 20Mrad以上の耐性を持つ。
    - 読み出しチップであるVA1TA チップが0.35µmプロセスでつくられた。
  - ラダーが3層から4層に増加、最内層の半径が3cmから2cmへ減少、立体 角が約10%向上。
    - •より高い荷電粒子検出効率とより精度良い崩壊点決定精度
  - fast shaper (75 or 300ns)とdiscriminator (TA)をVA1TAチップに実装
    - 世界初のSVDを使用したトリガーの試み。
  - データ読み出し系の改良。
    - DSPの代わりにPCをつかうことによって、約3倍以上のデータ処理速度 を達成。

### SVD2ラダーの構造と組み立て



#### 浜松フォトニクス社とメルボルン大学(オー ストラリア)で組み立て。



#### SVD2のインストール



news





KEK工作センターの大久保隆治さん、小池重明さん、 佐藤伸彦さん、鈴木純一さんがSVDの構造設計と製作につい て評価されて、第4回KEK技術賞を受賞なさいました。

### ハドロンイベント



### VA1TAチップのアンプゲインの経時変化

Layer 1

Layer 2

Layer 3

Layer 4

120



第1層目のゲインは30%減少。

#### アライメントとDSSD上の位置分解能



#### **Impact Parameter Resolution**



低運動量域で約20%以上改善

△z 分解能 (MC)





TAヒット情報を使ったトリガーロジックを開発中。

### データ収集システムの性能



PC12台(2.4GHz Xeon dual CPU)を使用。

PC上でsparsification(ヒット したストリップデータのみを 拾う)を行う。

CPの破れ  

$$\begin{vmatrix} B^{0} & f_{CP} \\ + & B^{0} & B^{0} \end{vmatrix} \begin{vmatrix} \overline{B}^{0} \\ \overline{B}^{0} & \overline{B}^{0} \\ \overline{B}^{0} & \overline{B}^{0} \end{vmatrix}$$

$$A_{CP} = \frac{f_{\overline{EP}}\overline{B^{0}}(\Delta t) \rightarrow f_{CP}) - \Gamma(B^{0}(\Delta t) \rightarrow f_{CP})}{\Gamma(\overline{B^{0}}(\Delta t) \rightarrow f_{CP}) + \Gamma(B^{0}(\Delta t) \rightarrow f_{CP})} \begin{bmatrix} \overline{B}^{0} \\ \overline{B}^{0}$$

標準模型では、CPの破れはCKM行列によって説明される。

Wolfenstein  $\frac{1-\lambda^2/2}{\lambda} \quad \lambda \quad A\lambda^3(\rho - i\eta) \quad V_{ud} V_{ub}^* \quad V_{ud} V_{ub}^*$ 

#### SVD1を用いたCPの破れの測定結果(1)





140fb<sup>-1</sup>のデータ  
(2003年夏まで)  
$$S = -\xi_{f_{CP}} \sin 2\phi_1 \quad \xi_{f_{CP}}$$
: CP固有値  
 $\sin 2\phi_1 =$   
0.733 ± 0.057(stat.) ± 0.028(sys)  
 $A = \frac{|\lambda|^2 - 1}{|\lambda|^2 + 1}$ 

直接的CPの破れが無いことと矛 盾していない。

#### SVD1を用いたCPの破れの測定結果(2)



#### SVD1を用いたCPの破れの測定結果(3)

*B*  $\pi^+\pi^-$  140fb<sup>-1</sup> (1529events, including B.G.)



#### SVD2での物理の展望

- 2003年秋から2004年夏までにSVD2で、約150fb<sup>-1</sup>のデータが 貯まると予想される。
  - 位置分解能、位置決定効率がそれぞれ約10%程度あがる。
  - SVD2で1年で貯めたデータはSVD1で4年間貯めたデータと 同程度となる。
  - 両方のデータの和をとると、統計エラーが~1/ 2に減る。
    - ただし、バックグランドに大きく依存するが。。。
  - $-b \rightarrow ccs \sigma \sigma \sin 2\phi_1 \sigma \tau = -b \delta$ , 6%  $ccs \sigma \delta$ .
  - $B \rightarrow \phi K_S$ でのSのエラーは30%程度に減少
    - ・中心値が変わらないとすると、Sの差は約5σに上昇。
  - $B \rightarrow \pi^+ \pi^-$ のCPの破れはSVD1で発見された。
    - 今後は直接的CPの破れを測定することが重要。
    - 中心値があまり変わらないとすると4σ程度の有意差で 検出。

#### まとめ

- KEKB加速器は世界最高のルミノシティー強度でBelle実 験に億単位の大量のB中間子を供給している。
- 2003年夏にSVDがアップグレードされた。
  - 放射線耐性、位置決定の精度と効率、データ処理能力の向上。
  - トリガー機能の導入。
- SVD2は2003年秋から順調にデータを貯めつつある。
  - 2004年夏のKEKBシャットダウンまでには150fb<sup>-1</sup>データが貯まると見込まれている。
- SVD1は4年間順調に作動し、140fb<sup>-1</sup>のデータから数々の重要な物理結果を我々に与えてくれた。
  - $b \rightarrow ccs$ モードを用いたsin2 $\phi_1$ の精密測定。
  - $B \rightarrow \phi K_S$ モードでのSの測定。
  - $B \rightarrow \pi^+ \pi^-$ モードでのCPの破れの発見。
- 2004年夏までのSVD2のデータに乞う、ご期待。

# backup slides

DSSD	L1~	-L3	L4		
	P(z)	N( )	P(z)	N( )	
size(mm)	79.2x28.4		76.4x34.9		
Strip pitch	75µm	50µm	73µm	65µm	
# of strip	1024	512	1024	512	
Strip width	50µm	10µm	55µm	12µm	

### SVD2のDSSDの仕様

# SVD1のDSSDの仕様

	strip pitch	read-out pitch	# of channels
r-φ	25µm	50µm	640
Z	<b>42</b> μm	84µm	640

#### SVD1

Laver Radius	Radius	Length	Ladders	s DSSDs	Beam pipe radius: 20.0mm	
	(mm)	(mm)	per layer	per ladder	Total coverage : 23°<	
1	30.0	112.5	8	2	$\theta < 139^{\circ}$ in polar angle.	
2	45.5	168.5	10	3		
3	60.5	224.5	14	4	Total # of channels: 81920	

#### SVD 2

Layer	Radius (mm)	Length (mm)	Ladders per layer	DSSDs per ladder	Тс 17
1	20.0	156.5	6	2(1+1)	an
2	43.5	236.2	12	3(1+2)	(m
3	70.0	395.6	18	5(2+3)	# (
4	88.0	457.8	18	6(3+3)	

Beam pipe radius: 15.0mm Total coverage : 17°< θ < 150°in polar angle (matching with CDC) # of read-out channels: 110592





#### Time variation of sigma of Beam Vertex for Bhabhas



1529 candidates (801  $B^0$ - and 728  $B^0$ -tags) containing (372 ± 32)  $\pi^+\pi^-$  signal events









